

# 「経済」における倫理学の可能性…具体的な実践例に即して<sup>(1)</sup>

荒谷 大輔

本稿の目的は、現代のメディアの状況において、無意識的な次元での選択可能性が縮減される中で、実際に倫理学が影響を与えうるとすれば、どのような道筋がありうるのかを示すこと、である。与えられた課題は漠として大きいのが、以下、1. 「現代のメディアの状況」について、本稿の文脈で一定の限定のもとに全体像を概観した上で、2. そこでの「倫理学」の可能性を提示し、3. 具体的な事例をもって問うことにしたい。

## 1. 「現代のメディア」における欲望の支配

まず「メディア」という概念について、多義性による議論の拡散を防ぐため、本稿での限定を加えておく。「メディア」とは、周知のように、「媒体」を意味するラテン語の Medium の複数形であるが、ここには、それによって人びとが関係がするもの一般が含まれているといえよう。「媒体」である限りにおいて、メディアは、人びとの関係を超越的に規定するものからは区別される。例えば、言語はそれ自身、人びとの関係を媒介することにおいて、ひとつのメディアといいうるが、言語が法として働く場面では、「メディア」よりも上位の審級が生起していると考えべきだろう。人びとを規定する法や制度の次元は、人びとの関係の中から立ち上がるものだとしても、関係性から独立して機能することにおいて、「メディア≡媒体」とは区別されるので

ある。

それゆえ、メディアとは、少なくとも理屈の上では、メッセージの発信者と受信者の間の権利的な同等性を前提にした概念といえることができる。同じメディアを用いることにおいて、発信者と受信者は常に入替可能で、メッセージは権利的には双方向であることを本質としていえる。技術と能力、あるいは制度的な特権性によって、特定の発信者のメッセージの強度が高められ、ひとつの特権的なメッセージが一方的に伝達されることがありうるとしても、「媒体」であることにおいて、メディアは、発信者と受信者の権利的な同等性の上に成立していると考えることができるのである。

とりわけ、「現代のメディア」として機能しているものについて、この特徴は顕著であるといえる。「現代のメディア」として考えられるのは、例えば、新聞、論説、小説、TV、映画、漫画、インターネット上で展開される様々な形式の媒体（掲示板、ブログ、SNS、Twitter、等々）などであろう。これらのメディアについては、それぞれに独自の形式をもっており、ひと括りに語ることはできない。しかし、これらの「現代のメディア」に共通した特徴として、メッセージの発信者と受信者との間の権利的な同等性が、近代社会のシステムとの関係において、一定程度、実現をみているという点が挙げられる。

二〇一四年一月三十日受付

\* 江戸川大学人間心理学科准教授 哲学、倫理学

ここでの主題的な考察からは外れるものの、民主主義と呼ばれるシステムは、メディアにおける伝達の非対称性を解消するものとして機能しようとするものと考えられるのである。

しかしながら、まさにそうして、「現代のメディア」において、発信者と受信者の間の権利的な同等性が確保されることによって、伝達されるべきメッセージについての価値判断が問題となる。メディアの外部に価値判断の基準を設定し、超越的な次元から特定のメッセージについての強度が保証される構造を離れた「現代のメディア」は、メディアの内部におけるメッセージのやり取りの中から「伝達されるべきメッセージ」を浮かび上がらせる。あるメッセージが他のメッセージに比べて強い伝播力を持つのは、外的な基準に照らした価値をもつからであるというよりもむしろ、それが「媒体」としてより広範な人びとの関係を規定することに求められるのである。

それゆえ、現代のメディアにおいて、発信者が自らのメッセージの伝播力を強めるために必要なことは、特定の価値基準に準拠した価値をもつこと以上に、実際に媒体として人びとの関係を規定する範囲を広げることとなるだろう。発信者は、受信者の欲望の鏡となり、受信者の欲望へ訴えるメッセージを発することによって、自らの価値を高めることができる。大きな伝播力によって人びとの関係に作用するメッセージは、まさにそのことによって、「伝達されるべきメッセージ」となるのである。現代のメディアは、訴求力の高さを基準としてメッセージの価値をはかることにおいて、発信者と受信者の間の権利的な同等性を実現しているのだ。

「現代のメディア」における、人びとの欲望に準拠した内在的な価値基準の設定は、「独断的」な価値基準を外的に規定する危険から人びとを救う一方で、極めて逆説的なたかたで、人びとの欲望を支配する契機をもつことになる。というのも、訴求力の高さがそのまま価値と見なされるメディアのなかで、価値の高さが訴求力を高めるとい

正の因果関係が逆転し、訴求力の高さが価値と見なされる現象が生起するからである。「現代のメディア」においては、内容にかかわらず「マス」であることが情報の信頼性を担保し、その内容に関わらず人びとの耳目を集めることが、自らの発言力を高める重要な契機となる。ひとたび価値づけられたメッセージは、そうして、まさに人びとの関係を規定する媒体として機能することになる。「鏡」として人びとの欲望の似姿を映し出すメディアは、まさにそのことによって、人びとの欲望の対象となるのである。

ケインズによれば、利潤をもとめて動く人の欲望の動きは、「投票者が百枚の写真の中から最も容貌の美しい六人を選択し、その選択が投票者全体の平均的な好みにも最も近かった者に賞品が与えられる新聞投票に見立てられる」<sup>(2)</sup>といわれる。投票者は、そこで、価値があるものは何かという問いに際して、集計後の上位と自分の選択が合致すること、利益を得るのである。これは、資本主義社会における利潤発生の構造を示した、非常にわかりやすい例だといえる。投資においては、人びとの人気を集め、値が上がりそうなものに賭けることが重要であり、「人気を集めそうなこと」自体が人の欲望の対象となる。鏡に映し出された人びとの欲望の対象が、実際に人びとの欲望の対象になるのである。

ここで重要なのは、投票者の欲望が、自分自身が固有にもついていたであろう価値の基準によってではなく、集計後の結果を見越した一般性を基準としている点である。投票者が「利益」を得るためには、自身自身のうちにもついていたはずの欲望を括弧に入れ、「平均的美人」を欲望することを強いられる。そこで価値づけられる「美人」は、あるいは実際には誰の欲望にも即していないものかもしれない。人びとはしかし、経済のゲームの中で、互いの欲望を読み合う過程で析出される平均的欲望を自らの欲望とし、その価値基準にしたがって自らの行為を決定するよう促される。一般性の次元において仮構される価値に

準拠することで「利益」が得られる構造の中で人びとは、自らに固有にあったかもしれない欲望を書き換え、より一般性の高いものを欲望するようにするのである。

こうした、人びとの欲望自体が一般性を鏡として構造化されることを経済の原理と呼ぶとすれば、現代のメディアを介した人びとの価値判断は、まさに経済原理をもとに決定されているということができる。発信者も受信者も、ともに高い訴求力をもったメッセージを価値と見なす構造のなかでは、人びとが何を欲望するかという基本的な次元において、メディアの影響を強く受けることになるのである。すなわち、「現代のメディアの状況」をひとこととすれば、上のような経済の原理に基づいて、人びとの欲望が互いに互いを支配する構造といえることができる。現代において機能しているメディアは、その形式は様々でありうるが、人びとの欲望を経済の原理にしたがって規定する特徴をもっているといえるのである。

## 2. 倫理学の可能性

さて、「現状のメディアの状況」がこのようなものとすれば、そこで倫理学が実際に影響力をもつためにできることは何であろうか。考えうる選択肢は二つに限定されるように思われる。

ひとつは、倫理学自体を経済原理に準拠させる方法である。倫理学の訴求力を高め、「人びとの必要」に強く訴えることで、倫理学の「価値」を高めようとする道である。実際それは、現在の政治的な状況において、倫理学が、大学の内外を問わず要求され続けていることでもあるだろう。「倫理学が何に役に立つのか」。そのような問いによって求められているのは、倫理学もまた、経済原理に準拠した「価値」を持たなければならないということだと思われるのである。

実際、倫理学にも、その要求に応える動きが出てきて久しいといっ

てよい。「応用倫理学」という分野の成立自体が、幾分かはこうした社会的な要求に応えようとするものといえるし、本稿執筆の契機となった昨年度日本倫理学会の共通課題における奥田太郎氏の提題もまた、積極的にその役割を担おうとするものだったようにも思われる。

しかしながら、そうした倫理学の方向は、学問の根本において、決定的な質の変化をもたらすものにならないように思われる。訴求力の高さが価値とみなされる構造に倫理学が準拠することで、倫理学者の欲望自体が経済の原理によって規定されることになるからである。価値によって訴求力が規定されるより以上に、訴求力によって価値が決まる構造の中では、倫理学者の欲望もまた、単に外的な要求に応じて出力の形式を変えるということより以上の根本的な構造化を被ることになるのだ。

それゆえもうひとつ、倫理学が採りうる方法があるとすれば、それは、経済原理が浸透したメディアの状況を相対化し、その機能を批判的に語る学問として、倫理学を機能させることであるだろう。過去のテキストのリソースを用い、現行のシステムに還元されない知を機能させて、ありうべき人びとの関係を語ることが、倫理学の本来のあり方であるように思われる。

だが、そうした倫理学的研究が、現行の経済と無関係に成立するものであるかといえば、そうではない。倫理学が現行のシステムから距離をとり、過去のテキストとの対話において、それを批判的に語るとしても、その批判的な立ち位置は、現行の経済との関係においてのみ、意味を持ちうる。「役に立たないからこそ意味がある」という批判性の矜持は、過去の遺産に胡坐をかくことによってはなく、現行の欲望の支配の構造に関わることによってのみ、正当性を保ちうるものと思われるのである。

それゆえ、現在のメディアの状況において、倫理学が実際に影響力を持ちうるためには、単に批判的に距離をとることにとどまらず、積

極的に人びとの欲望に関係していく必要がある。もちろん、こうした倫理学の積極的な介入については、過去の反省を踏まえた慎重論もあろう。倫理学が、何らかのしかたで「規範」を示し、それに準じて人びとの行為を規定していくことは、「現代のメディア」によってもたらされた発信者と受信者の間の権力的な同等性を犯す暴力的な所作であるようにも思われる。過去のテキストへ通じる特権的な立場から、メディアの外部に超越的なかたちで「規範」を示すことは、非対称的なメッセージの伝達の構造をもつことにおいて、暴力的な作用をもつように思われるのである。

だが、何らかの実定的な規範を一段から振りかざすことだけが、倫理学の可能性なのではない。現代のメディアにおいて実現している発信者と受信者の権力的な同等性を反故にすることだけが、「現代のメディアの状況」を批判的に語る可能性を尽くすわけではない。人びとの欲望が経済の原理へと統合される構造を切り分け、別様な構造化の可能性を示すことができるならば、それが倫理学の可能性となりうると思われる。

実際、経済の原理へと統合される欲望のあり方は、人びとに著しい「不自由」を課すことにもなっている。自らの固有な欲望から離れ、メディアの鏡に映し出されたものを欲望するように強いられる経済の構造は、人びとの多様な欲望に準拠しているという建前の上に、欲望されるべきものについての規範を創出する機能をもっているように思われる<sup>3</sup>。各人の欲望は、同じひとつの経済に統合されることで、非対称的な形式の適用を被るのである。

そうした構造的な欲望の「不自由」に際して、別様な関係性のあり方を提案することは、単に倫理学が生き延びるための方策である以上に、倫理学の責務であるといえるだろう。以下、「現代のメディアの状況」における倫理学の具体的なあり方を探ることで、倫理学の応答可能性のひとつを示したい。

### 3. 倫理への欲望：リトルネロ・ファクトリー

人びとの欲望を経済原理への統合から引き離し、別様な関係性へと開いていくにはどうすればよいか。「別様な可能性」としてありうる構造の理論的な考察については、別に詳しく展開したため、ここでは立ち入らない<sup>4</sup>。人びとの欲望の構造化は、すぐれて精神的な問題といえるが、その道具立てを用いることで、一定程度の「別様な構造化」の可能性を示すことができる。

だが、そのような理論的な可能性を示しただけでは、実際に現代のメディアの状況において、倫理学が影響力をもちうる道筋を示したことはならないだろう。ここではむしろ、そうした理論的な構造の実践可能性について、筆者を含めた周辺の研究者／実践者によって進められている具体的な事例をもとに問題を考察してみたい。

#### 本の物質性

現在、特定非営利法人を申請している「リトルネロ・ファクトリー」という団体では、経済の原理に統合される人びとの欲望を、別様なかたちで繋げていく様々な試みがなされているが、その試みのひとつに、買い取りに出される古本に、元所有者の情報が記載されたウェブサイトへのリンクを貼り付ける「古本プロジェクト」がある。ここでは、「本」というメディアを通じて、人びとの「倫理への欲望」を喚起する構造を、現行経済の中に接ぎ木する試みがなされている。

所有者の死、あるいは特別な事情によって手放された蔵書は、たいへいの場合、古本業者に引き取られて、元所有者の記憶を消去されたかたちで再び市場に流通するか、古紙へと還元される。本は、ひとつのメディアとして、まずは形式的に、人びとの欲望へ訴える機能を果たしうるが、メッセージの伝達という観点で考えるならば、本の物質

性は、流通の速度に対する重い足かせとしてしか機能しない。メッセージ内容の伝達という点でいえば、様々な形式において発達した電子メディアに比べて、「本」というメディアは、物質的なものに強く規定されるものであるがゆえに劣るものとみなされるのである。

だが、本の物質性は、時間的空間的な限定を加えるものであるがゆえに、ある種の固有性を際立たせるものとして機能しうる。最近の研究によれば、紙を媒体とした小説の読書体験は、電子書籍リーダーのそれと比べて、物語プロットの再現率において著しく高い数値を示すとされる<sup>⑤</sup>が、それは、本の物質性による特質といえるだろう。「物語の進行に合わせて紙をめくっていくという作業が一種の感覚的な補助」となり、時間的空間的に局所化された体験を、はつきりと手触りのある経験として刻むことになるのである。

本の物質性は、こうした「読むこと」における経験の「現実性」を担保すると同時に、その本の存在自体を基礎づけてもいる。本は、印刷技術によって「同じ内容」を複製化すると同時に、その物質性において、個別の存在をもつ。時間的空間的に限定された存在としての本は、他の複製物と「同じもの」であると同時に、固有の「現実性」をもつものとなっているのである。

古本の流通で歴代の所有者の情報登録するシステムは、それぞれの本にそれぞれ異なった来歴を刻むことで、個別の本の特異性を浮かび上がらせる効果をもつことになる。それぞれの本は、それぞれの歴史において読み継がれることで、その本に固有の「現実性」を呈示するのである。読書の経験は、そこで、単にひとりの読み手の主観的な意識の中で完結するものではなく、他の読者の経験の積み重ねを背景に立ち上るものとなるだろう。そこで経験される「現実性」は、歴史の中で積み重ねられた他者との関わりの中で、受け取られるメッセージの強度をつよめることになるのである。「本」というメディアを介したメッセージの伝達は、そこで、経済原理に即した訴求力による価

値尺度とは異なる次元の「価値」を呈示する可能性をもつことになるのだ。

### 倫理への欲望

本というメディアは、特権的な発信者をあらかじめ設定することなく、誰もが潜在的な発信者であり、潜在的な受信者でありうる場を提供するのだといえる。ここでは、発信者と受信者の間の権利的な同等性は確保され、特定の超越的なメッセージがメディアの外部に措定されることは前提にされない。しかしながら、固有の来歴を刻まれ、他者の経験を縮約した「現実性」を開示しうる本は、発信者と受信者の間の権利的な同等性のただなかにおいて、固有の非対称を生起させることを可能にする。他との比較において発生する相対的な判断基準とは異なる、ひとつの絶対的な立脚点が示されることで、一般性を基準とした欲望の支配的な統制から自由な「価値」の判断が可能となるのである。

そうした価値の絶対化は、しかし、そうした価値の絶対化は、しかし、メディアの外部に特権的な参照項を制度的に措定することによって実現するのではなく、あくまでメッセージの受信者の側の「倫理」<sup>⑥</sup>において生起していることが重要である。特定の「本」を「読まれるべきもの」として制度的に措定するのではなく、「本」というメディアの形式の中に、絶対的な非対称が立ち上る構造を組み入れることによって、外部的な権力とは無関係に、内在的な仕方「倫理」に基づいた人びとの価値判断が可能となるのである。それは、一般性を基準に欲望が統制される現代の社会においては、ひとつの「解放」であり、人びとの「倫理」へと向けられた欲望を可能にするものとして機能しうる。経済原理に準拠したメディアの構造においては強く抑圧されざるをえなかった人びとの倫理への欲望を解放することで、同様に経済原理を押し付けられる倫理学の可能性が新たに与え直されると思われる

るのである。

註

- (1) 本稿は、平成26年10月3日開かれた日本倫理学会第65回大会におけるワークショップ「倫理学はいかにして人々の心に響きうるか」の提題のひとつとして発表されたものである。
- (2) J.M.Keynes, *The General Theory of Employment Interest and Money*. London: Macmillan, 1951, p.156
- (3) この論点についての詳細は、拙著『経済』の哲学』せりか書房(2013)、一一九頁以下を参照。

- (4) この点については、前掲書一六一頁以下を参照いただければ幸いである。
- (5) Mangen, Act al. (2014). Mystery story reading in pocket print book and on Kindle: possible impact on chronological events memory. Conference paper presentation. IGEL (*The International Society for the Empirical Study of Literature and Media*), Turin, Italy, July 21-25
- (6) 「倫理」という概念は、ここでは暫定的に、精神分析家ジャック・ラカンの定義、すなわち、「現実的なものと対峙し続けること」を参照して用いられてゐる。